

長岡京左京第435次(左)・第436次(右)調査遺構平面図

木簡や墨書土器が出土したのは、西外郭の南西側にある流路及びその周辺である。流路の改修過程では、大量の炭が廃棄されており、中にはふいごの羽口、炉壁などの鍛冶関連遺物や「東院」と墨書された須恵器も含まれている。流路の廃絶段階では、土器・木製品・瓦などが大量に捨てられ、木簡も局所的に一括廃棄されている。

本調査地からは、中世集落である戊亥遺跡にかかわる遺構・遺物も多数確認されている。主な遺構として小柱穴約一〇〇基、井戸二基、土壇墓一基などがある。とりわけ、井戸一基からは、瓦器碗をはじめ多数の供膳具類とともに、呪符木簡(未報告)も出土している。

二 左京二条大路・東二坊大路交差点(左京第二九六次調査)

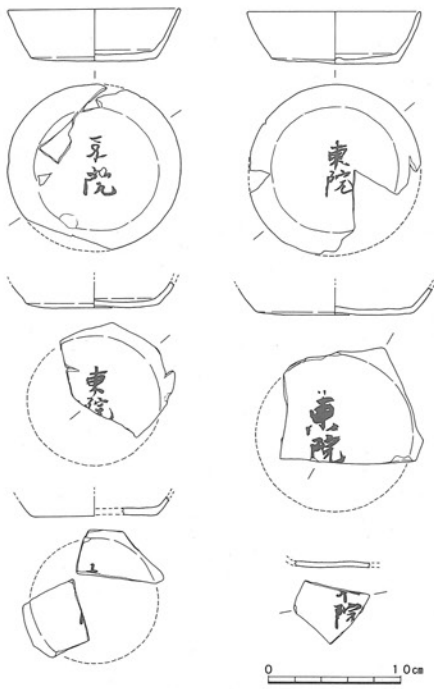
調査地は、二条大路・東二坊大路交差点南西部の左京第一六二次調査(『向日市埋蔵文化財調査報告書』二七、本誌第九号)の西隣接地に相当する。調査では、二条大路南側溝を確認し、側溝の付け替え(前・後期)があることを追認した(第一六二次調査時は旧条坊呼称により二条条間大路南側溝として報告している)。前期側溝SD二九六五〇は、旧河道を改修したもので、しがらみSX二九六五二を伴う。後期側溝SD二九六五一は、前期側溝の北約六mに位置する東西溝である。幅四・八m深さ〇・五〜〇・六m。南肩に丸杭による護岸施設を伴う。埋土は三層で、上層が粘質土、中・下層が砂・砂礫である。中・下層は溝機能時の堆積である。

長岡京期の土器類・瓦類・木製品・金属製品・動物遺存体など、

出土遺物の多くは中・下層より出土した。木簡は、凹地に最終的に溜まった状況を示す上層より出土した。持ち帰った堆積土の整理作業（洗浄）中に確認したもので、共伴する遺物に長岡京期の土器が少量ある。

三 左京三条二坊一町（左京第四二五〇二次調査）

調査地は桂川の氾濫原に位置し、現地表面の標高は約一四mを測る。長岡京の条坊復原では三条条間北小路、東二坊坊間西小路交差点および、左京三条二坊一町南東隅にあたる。付近一帯には太政官厨家、造長岡宮使など太政官や造宮関係の官衙町が存在したと考えられている。調査は交差点北西部を左京第四二五〇二次調査として実施し（調査面積七八㎡）、東半を左京第四二九次調査（本誌第三二号）と



SX435011及びSD435025出土
「東院」墨書土器実測図

して実施した。

左京第四二五〇二次調査の検出遺構は、三条条間北小路北側溝、東二坊坊間西小路西側溝、土坑一基である。三条条間北小路北側溝SD四二五〇一は、断面形が二段落ち状の幅広の溝として確認した。規模は幅約二・五m深さ約〇・七mである。埋土は上層の暗灰褐色砂粘質土、下層の暗灰色粘質土の二層に区分でき、下層から多量の遺物が出土した。埋土にブロック状の灰色シルト、黒褐色有機質土などが含まれることから、多量の遺物とともに埋め立てられたことを窺わせる。東二坊坊間西小路西側溝SD四二五〇二との交差点部分の状況は、ともに路面を横断する井桁状に交差することを確認した。溝の規模から、三条条間北小路北側溝は左京域の基幹排水路のひとつとして掘削されたと考えられる。東二坊坊間西小路西側溝は、幅約二・五m深さ約〇・三mの規模である。埋土は、上層が暗灰・暗灰褐色砂混じり粘質土、下層が灰色粗砂である。上層は三条条間北小路北側溝上層と酷似する。

削層を含めた木簡は、三条条間北小路北側溝SD四二五〇一から二四九点（うち削層一二点）、東二坊坊間西小路西側溝SD四二五〇二から三点、両溝の交点部分から三点である。大半が三条条間北小路北側溝の下層から出土した。共伴遺物は墨書土器（「主厨」「厨」「学生」「南備王」「勢平」「讃岐国」「東」など）・土師器・須恵器・黒色土器・線刻土器・墨書人面土器・焼塩壺・土製品・軒平瓦・平

瓦・丸瓦・木製品・石製品・鉄製品・銭貨（萬年通寶・神功開寶）・
金属生産関連遺物（炉壁）がある。

8 木簡の釈文・内容

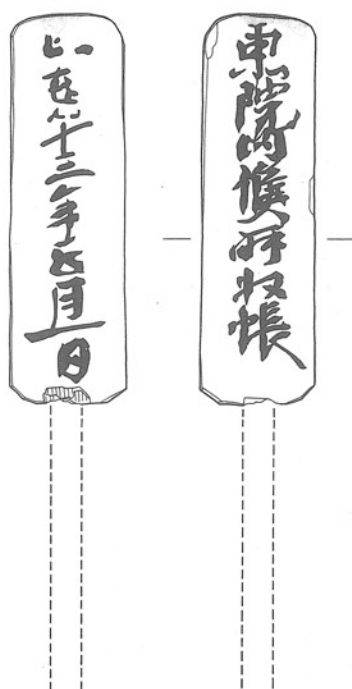
一 左京北一条三坊二町・三町東院跡（左京第四三五次調査）
宅地内流路SD四三三〇

(1) ・「始天應元年八月

・ (題籤軸) (86)×23.5×8.5 061

(2) ・「内蔵北二
蔵外出

・「延暦一年正月（題籤軸） (59)×31×11 061



(4)

(3) ・□：延暦十二年正月十六日□
[解申カ]
□□

・ (55+175)×41×4 019

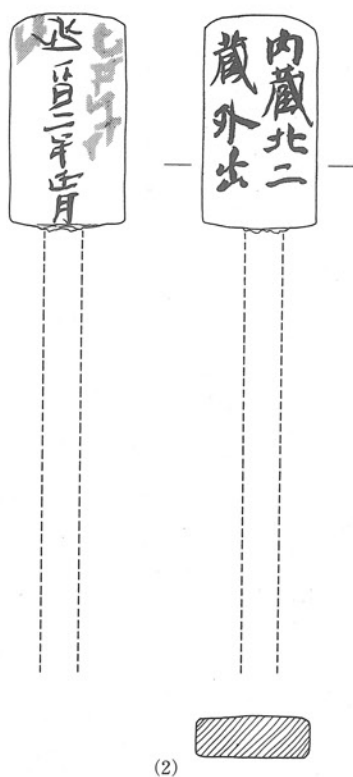
(4) ・「東院内候所収帳

・「延暦十三年正月一日（題籤軸） (104)×30.5×8.5 061

(5) [延カ]
□ 暦十三年正月一日 (90)×(9.5)×2.5 081

(6) ・「未申酉戌亥子丑寅卯辰巳
尚侍家染所□秦浄麻呂八月從一日始十一日」

・「別当石川朝臣仲善」 313×38×4 011



(2)

(7) 「勅旨所」

(186) × (14) × 4 019

(8) 「勅旨所」

(72) × 75 × 5 019

(9) ×「長」午弓 大和廣立「弓」 三国浄成「弓」

(569) × (32) × 6.5 081

(10) 「道河内万呂
凡鳥万呂」

67 × (53) × 5.5 011

(11) 「二月九日到着

大主鑑真成 佐比弘 少主鑑公成 国□□□
長上小縣 □麻呂

322 × 33 × 6 051

(12) 「寮仕丁十人

一人政所 一人縫殿 一人油衣所 一人臈纈 ×
一人市買并大炊米請 一人薪 三人□ ×

五月十一日大主鑑大 ×

(205) × 27 × 3.5 019

(13) 「寮仕丁拾人

一人政所 一人夾纈所 一人御服所 一人油衣
[作カ]

・「。□□□

五月十三日大主□大蔵真成

(189 + 117) × (24) × 2.5 011

(14) 「寮…所」

091

(15) 大主□ ×

(106) × (12) × 3 081

(16) 「内蔵

091

(17) 内蔵

091

(18) 蔵

091

(19) 「延暦十二年」

「□□□」 76.5 × (3) × 8 081

(20)

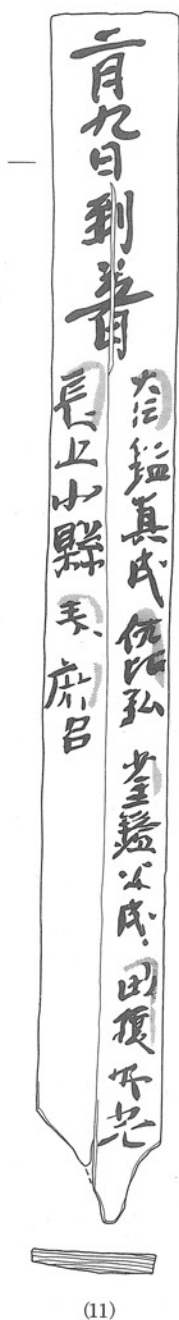
「速如件
右進早
速如件」

71 × 45 × 10 011
(釘孔二カ所あり)

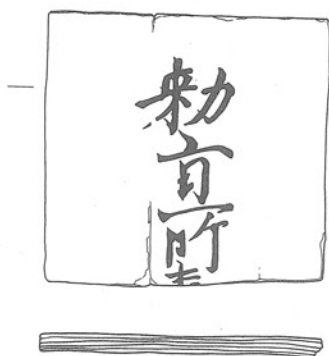
(21)

・「絶大□□□□

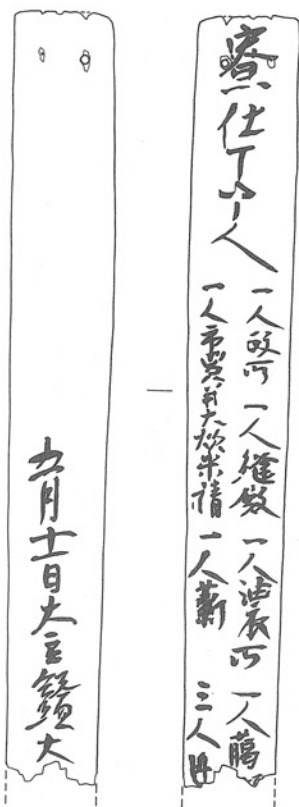
「□□□□」 (93) × 33 × 10 019



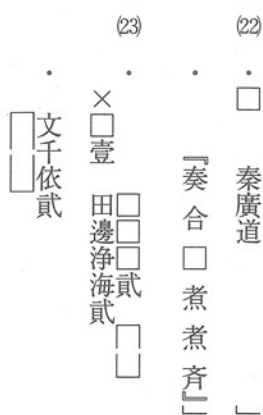
(11)



(8)



(12)



(22)

(23)

文千依貳

×壹 田邊淨海貳

(192) × (25) × 7 081

(26)

布勢第上

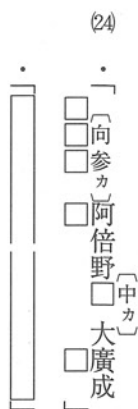
(133) × (8.5) × 2 081

(25)

茨田福高

(122) × (17) × 5 081

179 × (19) × 2.5 065



(24)

366 × (35) × 5 019

(27)	「未莉不一段」	106×17×5.5 051
(28)	・「＜白米五斗」 〔從カ〕	144×(20)×4 032
(29)	・「＜」 〔升カ〕	(633)×13×4 039
(30)	・「一人不仕」 〔三残カ〕	(86)×(7)×4 081
(31)	七位	091
	南北溝SD四三五〇〇七	
(32)	・「『太』」 延暦十二年八月十二 「太太太」 〔日カ〕	
	・「『太』」 〔取カ〕	
	夜見物	(99)×21×6 061
(33)	「□□賜五□」 「×□□」 「×帳」	(99)×(45)×8 061

(1)は題籤軸。天応元年は、桓武天皇が平城宮で即位した年にあたる。(2)は平城宮内蔵寮、北列二番目の蔵の蔵出帳の題籤。中務省被管の内蔵寮は天皇家の宝物を保管し、供御の品物を調達した。

(3)は日下に解とみえる文書の断簡。長岡京期の木簡としては最も古い日付をもつ。日付は遷都のため宇太村を視察した翌日のもの。

(4)は東院内候所で記録した収納帳の題籤軸。古代の題籤軸で最大の題籤部をもつ。内候所は内裏に侍る官司のため内裏の一郭に設置された。延暦一三年正月に東院が天皇の住まいであったことを示唆する木簡である。

(6)は東院と尚侍家との間で、技術者の派遣があったことを示す。

尚侍は内侍司の長官で、定員は二人。長岡京期後半の尚侍の一人は右大臣藤原継縄の妻、従三位百済王明信である。尚侍家の家政機関がどこに置かれたかは不明である。

(7)は上端に記し、下方に広い空白部がある。(8)は幅広の材で下端を二次的に切断する。勅旨所は、延暦元年四月に勅旨省を廃止した後、長岡京で復置した令外の官。天皇家の財産管理に携わり、内蔵寮の職掌と密接に関わると考えられている。

(9)(10)の和大・三国・道・凡のウヂ名は郡領層出身の衛府トネリが存在を推測させる。(9)は大型の歴名札。騎射や番奏などの特別な場で使用された札か、端正な文字で記す。下端と右辺のみ原形。現存部分が三段、二行(六名分相当)が残る。他に(10)のような歴名札が

多数出土しており、墨書土器「近厨」（近衛厨の略称か）との関わりが注目される。

(11)は内蔵寮官人（大主鑑二名、小主鑑二名、長上二名）の着到札。官職と名のみが記され、氏を記さない。完形品で先端を加工して尖らせる。(12)(13)は内蔵寮の大主鑑が記す寮内各組織への仕丁の配置文である。

年月日を記す木簡は七点出土し、うち四点が題籤軸である。木簡の年紀は、平城京で製作され長岡京にもたらされた題籤軸二点(1)天応元年（七八一）、(2)延暦二年（七八三）を除くと、延暦一二年正月から同一三年正月までに限られる。すなわち、東院木簡の製作年代は、東院が臨時の内裏であった時期と合致している。

二 左京二条大路・東二坊大路交差点（左京第二九六次調査）

(1) 酒酒カ

(90)×(11)×8 081

木簡は試料用に採取したしがらみ中の土塊から一点出土した。板目材。上・下端折れ。下端右側には刃物調整痕があり、先端を尖らせていた可能性がある。右辺原形、左辺割れ。隣の「酉」が二文字分残り、習書と考えられる。

三 左京三条二坊一町（左京第四二五次調査）

三条条間北小路北側溝SD四二五〇一

(1) ・「南院」□□

・「史生谷津×」 (84)×(22)×2 081

(2)

・政所厩□料陸□

・。 (166)×(20)×3 081

(3)

・「公文所」

・「勘史生」 (72)×(12)×3.5 081

(4)

・「飛驒国×」

・「勘史」× 48×(22)×4.5 019

(5)

・「乙訓カ」×

飛驒荒城郡工病并参人壬生マ□万呂

・「史生谷津万呂」 (216)×54×6 019

(6)

・「厨請櫻^(マ)二升八合」□□洗濯雇女七人料

・九月□日□□国益

・□□国益□□国益

・□□国益□□国益

381×37×3 011

- (7) 『小丹里人』
請飯陸升各式升
延曆八年七月廿四日勾廣床
(205)×43×5 081
- (8) 陸拾枚
付丈部繼「万呂」。
十一月十日柿本得成。」
(207)×(20)×4 019
- (9) 額田部垣守
□ □ □
大伴真国
(裏面は天地逆)
225×(38)×4 011
- (10) 「く七月十八日進内米員廿二石五斗
く」
「く『延曆六年』『七月十八日進人□□』く」
〔十人カ〕
171×27×4 031
- (11) 「く白米伍斗安万呂」
190×20×2 032
- (12) 「十二斤十二両く」
148×42×4.5 032
- (13) 岳田王。
(63)×(16)×2 019
- (14) 甘南備。
(61)×(21)×1.5 081

- (15) 「小縄牛勝」
(164)×19×3 019
- (16) 小縄牛勝
(109)×(14)×2 081
- (17) 「小縄牛勝」
(82)×18×6 019
- (18) 「□□く」
158×23×11 043

これらの木簡の釈読作業はまだ完了していないため、本稿では主要な木簡を選んで報告した。年号は延暦六・七・八年がある。木簡の種類は、文書木簡が最も多く、貢進物付札は少数である。文書木簡には、比較的大形で焼損している断簡、合点や追筆によって作業の過程が知られるもの、穿孔した木簡、横材に部材名と数値を書き上げた記録簡、小型人名札などがある。(17)は同人による追筆。

(18)は非常に丁寧な作りの封緘木簡の表簡。羽子板状の柄部に紐をかける切り込みをもつ。裏面(封緘の内面)は端部を作り出し、中央部を浅いV字状に調整する。現状は上半が二次的に切断され、文字も一部が削られている。

これらの木簡群の性格は周辺の宮外官衙町出土木簡と深く関わっているため、今後総合的な検討が必要と考えられる。

(一) 梅本康広、二 國下多美樹、三 中島信親、釈文 清水みき

